

晴天日放課後(2011年秋:7~10人)の屋内・屋外の児童分布と遊びの形態
 - 規模計画の観点から見た2室3領域型学童保育施設の使われ方その1 -

学童保育施設
 地域塾

納屋
 使われ方

改修
 空間機能評価

正会員 ○後谷一機**
 準会員 大和聡羅*
 正会員 草野啓太**
 正会員 中園真人***
 正会員 山本幸子****

1. 序論

1) 研究背景

1997年制定の児童福祉法により放課後学童保育が制度化され、学童保育施設の整備が進められているが、待機児童数は約1万人といわれる。都市地域では施設不足の解消と適正規模とされる収容児童数40人以下の施設整備の促進、農村地域では、未整備校区での施設設置が課題となっている。児童数減少に伴う余裕教室の利用は、既存施設の有効活用と管理運営の観点から今後も増加するものと推測されるが、これに加え民間を含めた小学校以外の既存施設の活用や民間組織による地域に密着した運営の促進が重要と考えられる。また学童保育は保護者が就労する家庭の児童が基本となるため、平日の放課後のみでなく休校日も保育が行なわれる施設が多く、児童の1日の生活の場として位置付け、終日保育を円滑に遂行できる運営体制と平日放課後よりも充実した生活プログラムの準備や、遊びに加え多様な学習の場としても機能する施設の空間構成が求められる。

2) 既往研究と研究目的

既往研究には学童保育施設を含む児童の居場所確保の重要性を指摘した研究¹⁾を始め、使われ方調査をもとに保育施設の空間構成のあり方を論じた研究成果^{2,3)}があり、2室3領域型^{注1)}のモデルプランも提案されている。最近では保育空間の分割方法と効果を検討した研究⁴⁾や学童保育と放課後子供教室の一体的運用のあり方を論じた研究⁵⁾等、今日的課題への展開が見られる。一方民間施設を活用した学童保育に関しては、民家型施設の平面構成を整理した報告⁶⁾、マンション設置型保育所・学童クラブの整備状況報告等があるが全体的には研究蓄積は少ない。筆者らは、民間施設活用型の施設整備の一環として、農家住宅納屋を放課後学童保育施設に改修整備するプロジェクトに参画し改修設計を担当した。既報では、夏休み期間中の塾の全体像を整理した上で、放課後平日と長期

休暇中の終日保育について使われ方の特徴及び学童保育施設としての有効性を検討するとともに、塾の取組みが児童の施設での生活に与える影響を明らかにした。

本論ではその知見をもとに、学童保育における生活プログラ



表1 放課後の生活プログラム (2011年秋)

日付(曜日)	天候	来所人数			合計	職員	時間			
		3-M/F	2-M/F	1-M/F			15	16	17	18
11/01(火)	晴	1/0	1/0	6/1	9	2	[自由] [おやつ] [勉強]			
11/02(水)	晴	1/0	-/-	5/1	7	2	[自由] [おやつ] [勉強]			
11/03(木)	晴	1/0	1/0	5/1	8	2	[自由] [おやつ] [勉強]			
11/04(金)	晴	1/0	-/-	7/1	9	2	[自由] [おやつ] [勉強]			
11/07(月)	晴	1/0	1/0	6/1	9	2	[自由] [おやつ] [勉強]			
11/08(火)	晴	1/0	1/0	7/1	10	2	[自由] [おやつ] [勉強]			
11/09(水)	晴	1/0	-/-	5/1	7	2	[自由] [おやつ] [勉強]			
11/10(木)	晴	1/0	1/0	5/1	8	2	[自由] [おやつ] [勉強]			
11/11(金)	晴	1/0	-/-	7/1	9	2	[自由] [おやつ] [勉強]			
11/14(月)	晴	1/0	1/0	7/1	7	2	[自由] [おやつ] [勉強]			

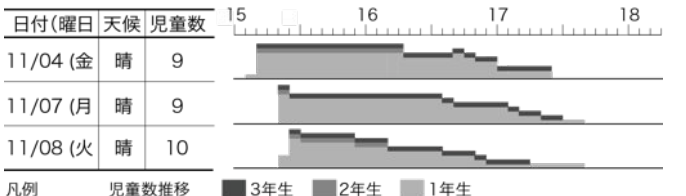


図3 1日における来所児童数の推移 (2011年秋)

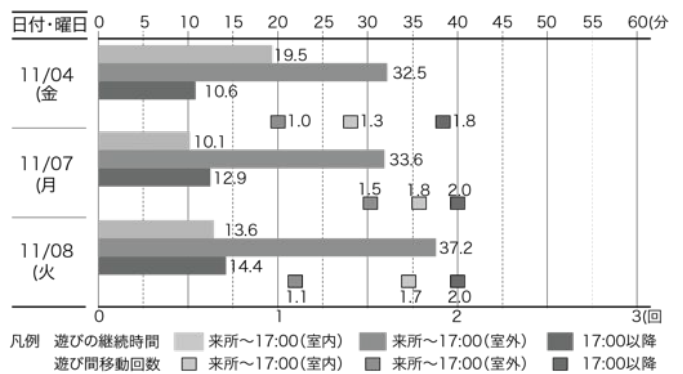
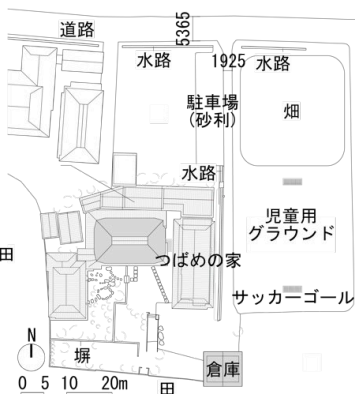


図4 遊びにおける継続時間と移動回数 (2011年秋)

ムと施設空間構成のあり方に関し考察を加えると共に、同一施設で人数規模のみが変化した場合の使われ方の変化を考察し、終日学童保育における生活プログラムと施設空間構成のあり方を明確にする事を目的とする。

2. 対象施設と調査概要

1) 対象施設

下関市菊川町に位置する、地域共生ホーム「中村さん家」の納屋が改修された建築物に「つばめの家」は設置されている(図1)。

既存の納屋 2 室と家畜小屋を多目的室・プレイルーム・畳コーナー及びトイレ・シャワー室としたコンパクトな 2 室 3 領域の空間構成であり(図2, 写真1,2)、手洗い・キッチン・収納を除いた有効面積は 60.9 m²(多目的室:28.5 m²、プレイルーム:27.6 m²、畳コーナー:4.8 m²)で、児童定員は 25 人(2.4 m²/人)である。

2) 調査概要と生活プログラムの基本構成

筆者らは 2011 年度夏より使われ方調査を開始した。その間に施設の空間単位は変わる事無く、人数規模や児童学年等の母集団の変化していった。本論では、その1からその4に渡り母集団の変化による使われ方の違いを明らかにし、空間構成のあり方を考察する。

本稿では、2011 年秋の事例を取り上げる。2011 年 11 月 1

日～11 月 14 日の平日放課後 10 日間を対象に使われ方調査を実施した、調査期間中の児童数(学年毎)とタイムスケジュールを表1に、来所児童数推移を図3に示す。3年生・2年生の児童が合わせて4名おり残りは主に1年生の児童で構成され、毎日10名前後(平均10.4名)の児童が来所する。児童は15:00過ぎに学校から徒歩で来所する。来所した児童からプレイルームでおやつを食べて、食べ終わった児童から多目的室で勉強を開始する。15:50頃になると勉強を終えた児童が現れ始め、勉強を終えた児童から自由遊びに移行する。児童は室内・室外で自由に遊ぶ。17:00になると室外遊びは制限され、児童は室内で自由遊びを行い保護者の迎えを待つ。保護者は施設来所時より順次児童を迎えに、来所するが、17:00以降に迎えにやって来る保護者が大半を占める。児童が全員帰宅するのは、18:00前後で全員が帰宅すると施設を施錠し閉所となる。また、遊びの継続時間と移動回数のグラフを図4に示す^{注2)}。来所～17:00(室内)・17:00以降の室内遊びについては、継続時間が「11月1日来所～17:00(室内)」の19.5をのぞくと10.1～14.4と比較的短く、17:00以降の遊びの移動回数は3日間とも2.0に近い値を示し頻りに遊びを変更している。比べて来所～17:00(室外)は継続時間が非常に長い値を示しており、これは外遊びにおいては1つの遊びを継続して長く行



図5 2011年秋における放課後の様子の典型場面(その1)

っているという結果を示している。

3. 生活プログラムの展開と空間の使われ方

図3、4より、生活プログラムの展開に沿って使われ方の詳細を考察してゆく。児童はそれぞれの下校時間によって来所時間は異なるが概ね、15:20～15:40には来所している。来所すると、各々のロッカーに荷物を置き、手を洗い、プレイルームでおやつを食べる。職員は児童の来所時間に合わせて予めプレイルームにはおやつのための、多目的室には勉強のための机を配置している(図面5-a)。来所予定人数により異なるが、多目的室には勉強用の机が3脚を2列、プレイルームにはおやつのための机2脚が用意される(写真5-a、5-b)。

おやつを食べ終わった児童から勉強に移行する。ロッカーから荷物を取り出し、各々多目的室の机に席を取る。職員は2名在室しており、1名が勉強の様子を見ており、もう1名はプレイルームでおやつの面倒を見ている(図面5-b)。全員がおやつを食べ終わるとプレイルームにいた職員がおやつを片付ける(写真5-c)。全員が多目的室で勉強を行うと、多くて12、3名の児童が同時に勉強をしている事になるが多目的室はその人数が一斉に学習を行うには十分な広さを有しており、プログラムの進行の上で特に影響は見られない。おやつ机を片付けた職員は多目的室へ移り勉強の面倒を見る。

15:50頃になると、勉強を終えた児童が、自由遊びへと移行

し始める。全員が勉強を終えるまでは多目的室では勉強を行っている児童がいるため自由遊びには使用されない。遊びはプレイルーム・室外のみ制限される。そのため勉強が終わるとほとんどの児童は室外へ遊びに向かうが、数名の児童が室内で遊んでいるシーンも見受けられる。プレイルーム全体を使用して追いかっこをするシーン(図面5-c)や、畳コーナーでレゴ遊びが行われているシーン(図面5-d)が見られるが、児童数名で構成された1グループのみなので、プレイルームで行われる遊びが静的遊び・動的遊びのどちらであろうと、行われる遊びが邪魔をし合う様なシーンは見られる事は無かった。プレイルームで行われている遊びが多目的室で行われている勉強へ干渉するシーンは数度見られ、追いかっこ等の動的遊びの音に多目的室にいる児童が反応する・多目的室とプレイルームで勉強を行っている児童と遊んでいる児童とがお喋りを行う等のシーン(写真5-d)が見られたが、その場合多目的室で勉強の様子を見ている職員が指導を行うため、プログラムの進行上に目立った影響は見られない。また勉強を終えた児童が室外へ遊びに出ると、職員1名は外遊びの様子を見るため一緒に室外へ出てゆき、もう1名の職員が引き続き勉強の様子を見る。使用されなくなった机は順次職員が片付けを行う。

16:20頃になると児童はほとんど勉強を終えて自由遊びへ移行している。室内では外遊びになじめない児童が職員とお喋り



図6 2011年秋における放課後の様子の典型場面(その2)

をしたり(図面 5-e)、ゲームをしたりしている(図面 5-f)。ただし、ほとんどの児童が室外で遊んでおり、室内で遊んでいる児童は数名になる。その数名が1つのグループを作り一緒に遊んでいる。遊びは静的遊び・動的遊びの区別無く、プレイルーム・多目的室をどちらも自由に使用している。プレイルーム全体を使用して追いかっこを行うシーン(図面 5-g)が見られる場合や、プレイルームと多目的室の2室を使用して追いかっこを行うシーン(図面 5-h)が見られる場合があった。どのように室内遊びが行われようと、室内遊びを行うのは1グループのみなので、プログラムの展開の上で・遊びが他の遊びを、邪魔する事は無く、職員も多目的室・プレイルームの2室をまたいで追いかっこをしていること等には特に指導を行う事は無く、のびのび自由遊びの時間を過ごしている。

同じくほとんどの児童が勉強を終えた 16:20 頃、室外では残りの児童が、それぞれグループに分かれて思い思い遊んでいる。主に室外遊びでは大きく、グラウンド・つばめの家南側スペース・庭・母屋玄関前広場の4スペースがあり、グラウンドではボール遊びが、家南側スペースでは簡易なボール遊びが、庭では土・草・虫いじりが、玄関前広場では縄跳び等、という様に行われる遊びの種類に応じて、外構空間における緩やかな領域の区別が存在していた。グラウンドには簡易なサッカーゴールが設置されており、主にサッカー等のボール遊びが行われる。またその他に、ゴールを拠り所にしてその周辺で泥遊びをするシーン(図面 6-a、写真 6-a)も見られた。グラウンドとつばめの家の間の通路でボール遊びを行うシーン(図面 6-b、写真 6-b)も見られ、屋根等の障害物を利用して遊ぶシーンも見られた。家南側には割と広いスペースがあり、グラウンドでのボール遊びとは別グループでのボール遊びが行われていた(図面 6-d)。また障害物を使用したボール遊び(図面 6-c、写真 6-c)が行われるシーンや、玄関前広場と家南側スペースとを使用して追いかっこを行う等のシーンも見られた。玄関前広場は地面が滑らかなアスファルト敷きになっており、縄跳び・竹馬等の遊び(図面 6-e)が行われやすいスペースになっている。児童が外遊びを行っている間は職員1名が必ず室外で様子を見ており、出入りする車両等に気を配って児童を指導している。また 17:00 以降の外遊びは制限されており 17:00 になると室内に誘導する。

17:00 になると児童は室内に戻り、自由遊びを行い保護者の迎えを待つ。17:00 の段階では大凡 10 名弱の児童が施設に残っており思い思いの遊びを行う。ビデオを見て過ごすシーン(図面 6-f)や、ビデオを見るグループと工作を行うグループに分かれて過ごすシーン(図面 6-g)、が見られるが、いずれも静的遊びは多目的室で行われる。追いかっこが行われる事もあるが、ほとんどの時間帯でビデオを視聴している児童グループがいるため、多目的室は静的遊び・プレイルームは動的遊びと行った様に領域区分されるよう職員が指導を行っている。またレゴ遊びを行う児童もおり、レゴ遊びは畳コーナーで行われる様、同様に職員が指導を行っている(図面 6-h、写真 6-d)。17:00 以前の室内遊び時の場合とは異なり、10 名弱の児童が室内で過ごしているため、グループ毎の遊びの性質も異なる、

そのため職員は静的遊びと動的遊びが排他し合わない様に指導するシーンが多く見られた。又、ビデオを見ている際には、ビデオの音量に注意するシーンや、プレイルームでの動的遊びが激しくなり音量を増す事にも気を配っていた。17:00 以降は順次保護者の迎えが訪れ、18:00 前には全員の児童が帰宅する。児童が全員帰宅をした後、職員は事務作業を行い、施設を施錠し帰宅し、その日の終日保育は終了となる。

4. まとめ

以上より 2011 年秋の使われ方調査における典型的なシーンを抽出しまとめた。2011 年秋の児童人数 10 数名が基本的な評価軸とし、その 2 以降では児童人数と母集団の変化における終日保育の様子をまとめると共に、既報⁹⁾において報告した、地域塾を中心とした長期休暇期間中の終日保育においても集団の変化による使われ方をまとめ、稿を改め空間構成のあり方についての考察を加える。

注釈

- 1) 児童の活動内容に応じて領域を区分している。つばめの家は多目的室・プレイルーム・プレイルーム内の畳コーナーの3領域を静的遊び・動的遊び・静的遊びの場所として区分している。
- 2) 遊びにおける継続時間と移動回数の算出式を記す。1人の児童の平均継続時間(Ti)を式(1)、全児童の平均継続時間(K)を式(2)で求める。

$$Ti = ti / pi \dots\dots\dots (1)$$
 ti: 児童 i の 1 日の自由遊び合計時間
 pi: 児童 i の 1 日の単位遊びの合計回数

$$K = \sum Ti / n \dots\dots\dots (2)$$
 n: 対象日の児童数
 遊び間の 平均移動回数(Md)を式(3)より求める。

$$Md = \sum mi / n \dots\dots\dots (3)$$
 mi: 児童 i の自由遊び時間内の合計移動回数

参考文献

- 1) 斎尾直子・長谷夏哉:都市における児童の居場所づくりの多様化と安全安心・豊かな空間確保両立についての考察,日本建築学会計画系論文集, No.614,pp,33-39,2007,4
- 2) 宮本文人・岩淵千恵子:学童保育施設における活動機能と平面構成,日本建築学会計画系論文集, No.618,pp,25-31,2007,8
- 3) 清水肇・小野尋子:学童保育施設の生活空間構成の実態,日本建築学会計画系論文集, No.668,pp,1799-1806,2011,10
- 4) 塚田由佳里・小伊藤亜希子:施設空間と保育方法からみた学童保育所の分割方法とその効果,日本建築学会技術報告集,第 27 号,pp,223-228,2008,6
- 5) 松本歩子・山根さおり・関川千尋:近年の学童保育所のあり方に関する研究,日本建築学会計画系論文集, No.630, pp,1683-1690,2008,8
- 6) 三宅勝司・高橋博久:民家型学童保育施設の空間構成に関する調査研究,日本建築士学会大会学術講演梗概集,E-1 分冊,pp,59-60,1997,9
- 7) 後谷一機・中園真人他 2 名:地域人材を活用した夏休み地域塾の取り組み,日本建築学会中国支部研究報告集,第 34 巻,pp.565-568,2012.3

* 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生 * Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.
 ** 山口大学大学院理工学研究科 修士課程 ** Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.
 *** 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博 *** Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng
 **** 筑波大学システム情報系 助教・博士(工学) **** Assistants Prof., Faculty of Eng., Information and Systems., University of Tsukuba., Dr.Eng.